

おくることば

ももづたふ 伊藤教授は うるはしき ひびをかさねて ななそちの 寿をむかふれば いにしは
る きまりによりて まなびやの 職をしりぞく しりへより みちゆくわれら 古稀をほき わか
れをしみ 小冊を あみておくと ささやけき まなびのしるし たづさへて ここにつどへり。
伊藤氏の 学といいへば なかつよの 日本文学 なかんづく 仏教文学をさねとして、そのみち
のおくをきはむるにとどまらず、そのほとりなるもろものふみのはやしにもあゆみいり、ひろくふ
かくさぐりつづけて、いとせおこたるなきさま、業績目録にさながらあきらかなり。そのひととなり
はるかぜのごとくあたたけきまなざしもて、ともどちにしたはれ、学生のたましひをとらふ。たゆた
ふなみのごときかたりくちは、たくまざるヒユウモアとなりて、きくもののこころをなごます。

わかきひの氏はまた、いくさにやぶれたるくにの教育と学術をふかくうれへ、その再興にあつきち
をはげしくもやしき。やがて仏教文学会副代表、日本文学協会委員をつとめ、さまざまのことをくは
だて書をあみて、おほきなるあしあとをしるせり。そのあゆみは年譜につまびらかなり。うちにして
は、みそとせになんなんとするつきひ、教育・研究・運営につくし、成城大学評議員・将来計画委員

をつとめ、はては、文藝学部自己点検・自己評価委員会をひきゐ、こちたきあげつらひのもつれをときたり。

大学をしりぞきてより、講壇にたつことはすくなく、みやこのにしなる日野に閑居して読書三昧・著述三昧にすごせりといふ。そは、氏のしたしくよみきたりし鴨長明・兼好法師の境涯なり。されど、よをすするにはあらで、いよよいのちをいたはりて、いとまをたのしみまなびをふかめ、なほきびしくわれらをみちびかれむことを、せちにねがふ。

十一月十一日

工藤力男